

第二次世界大戦後のハインリヒ・ザールハーゲにおける ナチス政権下の学校田園寮運動認識に関する考察

*江 頭 智 宏

1. はじめに
2. 戦後における中等学校教諭への降格処分
3. ドイツ学校田園寮連盟の第1回連邦会議
 - (1) 連邦会議について
 - (2) 第1回連邦会議におけるザールハーゲの報告
 - (3) 文部大臣への第1回連邦会議の案内
4. ドイツ学校田園寮連盟の連邦会議に関わる連邦大統領への書簡
5. ドイツ学校田園寮連盟の機関誌『学校田園寮』
 - (1) 機関誌『学校田園寮』について
 - (2) 第1号における巻頭言
 - (3) 第35号における学校田園寮運動の歴史の回顧
6. おわりに

1. はじめに

ドイツ連邦共和国(以下、「西ドイツ」とする)の初期における学校田園寮運動 (Schullandheimbewegung) の復興ならびに発展に最も深く関わった人物として、1950年に創設されたドイツ学校田園寮連盟 (Verband Deutscher Schullandheime, 以下「連盟」とする) のトップの立場に当たる第一議長を、創設時より1969年に亡くなるまで務め、没後は連盟の名誉議長の称号を受けたハインリヒ・ザールハーゲ (Heinrich Sahrhage, 1892-1969) をまず挙げることに異論はないであろう。ザールハーゲが、学校田園寮運動に果たしてきた功績をもって、1958年から1961年にかけてたて続けに、ハンブルク州の「国民の職務における真実の活動に対するメダル」(Medaille für treue Arbeit im Dienste des Volkes), ドイツ無宗派福祉連盟 (Deutscher Paritätischer Wohlfahrtsverband) の「金の名誉メダル」(Ehrenmedaille in Gold), そしてドイツ連邦共和国功労勲章1級 (Bundesverdienstkreuz 1. Klasse) な

どを授与された¹ことは、彼の学校田園寮運動への顕著な関わりを如実に物語るものである。

ザールハーゲの学校田園寮運動への最初の関わりは、ハンブルクのアルブレヒト・テア校に教師として勤務していたときに、学校附属の学校田園寮をハンブルク近郊のホイストドルフに設立したことに遡る。設立は1922年のことでそのとき彼は30歳であった。また1925年には、ハンブルクにおける学校田園寮運動の推進組織であるハンブルク学校田園寮活動共同体 (Arbeitsgemeinschaft der Hamburger Schullandheime) のトップに当たる議長にも若くして就任した。同じく1925年に連盟の前身に当たるドイツ学校田園寮全国連盟 (Reichsbund der deutschen Schullandheime, 以下「全国連盟」とする) が創設されたときにはその理事を務め、ハンブルクのみならず全国レベルで学校田園寮運動の推進に努めることになった²。本論の中でも取り上げるが、全国連盟が1927年10月より機関誌の刊行を開始して以降は長年に亘ってその編集長を務めており、ザールハーゲは広報の分野で最も力を注いだ人物であったと言える。1949年にマールブルク及びゴスラーで開催された学校田園寮運動の関係者が集っ

* 名古屋大学大学院教員

た教員会議（この会議は、連盟の第1回連邦会議への橋渡しとしての役割をもつものであった）の場で、既にベテランの域に達していた58歳のザールハーグが新たに足する連盟の第一議長に最適者として選ばれたのは、そうしたヴァイマル期以来の学校田園寮運動における十分な実績を踏まえてのことであった。

ところが学校田園寮運動は、これまで筆者が論じてきたように、ナチス期において理念的及び組織的に変容を被るも、決してそれ自体廃止されたわけではなく、その担い手もヴァイマル期から基本的に変わることはなかった。ザールハーグもその例外ではなく、全国連盟がナチス教員連盟の一専門領域へと編入した後も、彼はナチス教員連盟の一員として学校田園寮運動に一貫して従事し続けた。加えて、別稿で詳細に検討したように、ザールハーグは、第二次世界大戦下において、学校田園寮運動で培った彼自身の経験や人的ネットワークを「活用」しながら、恰も学校田園寮運動を進めるかの如く地元ハンブルクでの学童疎開を指導した³。その結果、イギリス占領軍政府のもとで行なわれた戦後の非ナチ化裁判において、ザールハーグには、学童疎開を指導した際に見られた「ナチス的な態度」を直接的な根拠として、中等学校上級教諭（Oberstudienrat）から中等学校教諭（Studienrat）への降格処分が下され、結局彼は中等学校教諭のまま1957年4月30日に教職生活を終えた⁴。すなわちザールハーグは、その関わりが戦後不問に付されることはないレベルで、ナチスとの関わりがあったのである。こうしたザールハーグの存在を念頭に置くと、戦後の学校田園寮運動は、ナチス期に関与した人物を追放して再建されたのではなく、ナチス期においても中核的に関わった人物を中心として再建されたと言える。

以上のことを踏まえると、ザールハーグが連盟の第一議長として表舞台に立って第二次世界大戦後の学校田園寮運動を再建するうえで、ナチス体制下でも学校田園寮運動に与した彼が、学校田園寮運動及び自分自身とナチスとの関わりを如何に説明したのかという疑問が当然浮かび上がってくる。そこで本稿では、学校田園寮運動を復興すべく奔走した第二次世界大戦後のザールハーグの発言や著述や書簡を追いながら、そこに見られる彼の学校田園寮運動の歴史に関する認識等を探ることを通して、ザールハーグがナチス期の学校田園寮運動及び自分自身をどのように認識したのかについて明らかにすることを目的とする。

学校田園寮運動との関係で第二次世界大戦後のザールハーグを取り上げた研究は、管見の限り、全国連盟の発足から75周年を記念して連盟が編纂した通史であ

る『時代の変遷の中の学校田園寮運動と学校田園寮教育』に掲載されたクルーゼの論稿「第二次世界大戦後（1945-1970）の学校田園寮活動」⁵に限られる。題目にも明示されているように当論稿は、学校田園寮運動の通史の中でも、1945年から1970年までの西ドイツ及び西側占領区域の時代を対象としたものである。しかしながら学校田園寮運動の通史を描くことを目的としているため、ザールハーグがナチス期の学校田園寮運動や自分自身を如何に認識していたのかということには焦点が当てられておらず、本稿はクルーゼの論稿とは課題が根底から異なるものである。

以下、本稿では、具体的には、降格処分を批判した書簡、連盟の第1回連邦会議の開会式での報告、連邦会議に関わって大統領に宛てた書簡、そして連盟の機関誌に掲載された著述などを素材として課題に迫っていく。

本稿で用いる史料は、連盟の機関誌『学校田園寮』のほか、コブレンツ連邦文書館に所蔵されている連盟を含む戦後の西ドイツの学校田園寮運動に関する各種ファイルや、ハンブルク州立文書館に所蔵されているザールハーグと学校田園寮運動に関する各種ファイルに収められた諸史料などである。

2. 戦後における中等学校教諭への降格処分

「はじめに」で述べたように、第二次世界大戦後、ザールハーグは、中等学校上級教諭から中等学校教諭へと降格処分を受けている。最初に、降格処分への応答に関する書簡を通して、戦後の彼がナチス期の自分自身を如何にみていたのかを垣間見たい。

彼の降格を直接確認できるのは、例えば、1947年4月29日に「国民社会主義者の排除に関する6b 専門委員会」がザールハーグに宛てた次のような書簡である。「1947年4月16日の書簡（609/EDN/369）をもって、軍政府は、中等学校での教授活動を暫定的に貴殿に認めましたが、それは中等学校教諭の立場としてです。それを受けて貴殿は中等学校上級教諭から中等学校教諭へと降格されなければなりません。将来的に貴殿が受け取る給与は中等学校教諭の給与です。間もなく学校管理局の教職員課から貴殿へより詳細な決定が届くでしょう」⁶。

こうした書簡を通して、ザールハーグが教職活動を継続する条件として、イギリス占領軍政府が降格を明示していることを確かに窺うことができる。

このような降格処分に対してザールハーグが応答している書簡の中から、時期はかなり遅いものであるが、1953年12月9日付の書簡を取り上げた。やや長

くなるが次のように述べられる。

「国民社会主義者の排除に関する6b 専門委員会」は、1947年4月29日に、私に、私は軍政府によってただ中等学校教諭としてのみ保証されるということを書きました。続いて学校管理局の教職員課が私に降格を伝えました。こうした降格の状態は今日も継続したままです。「学童疎開の指導者」として私がナチス党と密接に繋がっていたということが、再度の照会の際に私に伝えられました。私はこの二重の誤りに対して抗議します。というのも、学童疎開は、ナチス国民福祉団とヒトラー・ユーゲントが指導したものであり、私はナチス党のもとでの国家学校全権として、専ら学校教育の領域の代表でした。私は、確かに、1937年以降ナチスの党员でしたが、決して政治的な指導者ではなく、制服着用者でもありませんでした。1945年以降、教育庁は、まだ派遣されている全ての子どもたちと教師の帰還という困難な課題を私に委託しました。その課題を十分な成果のもとに処理し、市参事から明白な感謝を受けた後での専門委員会の決定は、口頭で話し合いをしたという私の願いが叶えられないだけに一層私を悲しませました。（中略）私の中等学校上級教諭から中等学校教諭への降格は、私のほぼ40年間における非の打ち所のない勤務に対する侮辱的な不当行為だと思っています。私はかつての正当な地位への復帰を望みます⁷。

この書簡の趣旨は明瞭であり、降格処分が下されたこと、そして1953年になっても未だにその処分が解かれないことに対する不満がかなり感情的に述べられている。そして、自分自身の生活に加えて学校田園寮運動の指導者としての立場も懸かっているからなのではあるが、ナチス期における自分自身のことを客観視することができない状況が伝わってくる。学童疎開はナチス国民福祉団とヒトラー・ユーゲント（以下、「HJ」とする）が進めたものであり自身が主体的に関わったわけではないことや、確かにナチス党员ではあったが積極的にナチスに加担したわけではないことを主張することを通して、ナチス期の自身の行動について弁明すると共に、ナチス期の12年間も含まれる40年間の「非の打ち所のない勤務」（これには学校田園寮運動での指導的立場も当然念頭に置かれているであろう）という功績をもって降格処分の不当性を訴えているのである。

以上のような降格処分に対する彼の応答は、次節以降で検討する、ザールハーゲにおけるナチス期の学校田園寮運動に関する認識の前提となるものである。

3. ドイツ学校田園寮連盟の第1回連邦会議

本節では、今後の連盟の指針を示すという点で重要な役割を果たした第1回の連盟の連邦会議（Bundes-tagung）を俎上に載せることを通して、戦後のザールハーゲにおけるナチス期の学校田園寮運動に関する認識について検討する。

（1）連邦会議について

最初に、連邦会議について、簡単に概観したい。連邦会議は、1950年の連盟発足を契機として開催されたもので、全国の学校田園寮関係者が集う形で数年に1回開催された。こうした全国レベルの会議はヴァイマル期の全国連盟時代から行なわれてきたもので、ヴァイマル期には計4回、ナチス期にも計3回の全国会議が開催された。連盟は、連邦会議の回数を記す際に、ヴァイマル期の第1回から通算したものも括弧書きで併記している（たとえば戦後の1回目は、ヴァイマル期から通算すると8回目となるため、「第1回（第8回）」のように表記される）が、本稿ではヴァイマル期からの通算回数の方の表記は省略する。なお、こうした会議の回数の記し方からは、連盟が戦前の全国連盟との繋がりを強く意識していたことを窺うことができる。

戦後の第1回連邦会議の開催地はザールハーゲの地元ハンブルクであり、1950年10月4日～8日の日程で開催された（正規の日程の中には含まれていないが、9日～11日においてもハンブルクの学校田園寮の訪問が実施された）。新たに作成された連盟の定款は、第3条において、連盟の本部をハンブルクに置くことが定められており⁸（全国連盟の本部はベルリンに置かれた）、ザールハーゲとハンブルクは、戦後の学校田園寮運動の出発を象徴するものであったと言える。なお、全国連盟のトップに当たる議長は、ザールハーゲではなく彼の長年の盟友ルドルフ・ニコライ（Rudolf Nicolai, 1885–1970）が務めていたのであるが、連盟の第一議長に就任したのがニコライではなかった根本的な理由として、彼の本拠地であるザクセンがドイツ民主共和国（東ドイツ）に位置したことが挙げられる。

ザールハーゲの存命中に当たる第1回から第7回までの連邦会議の開催地と開催期間は次頁の表1の通りである⁹。ザールハーゲの存命中の最後の開催地となったのは偶然にもハンブルクであった。

回数	上段：開催地 下段：開催期間
第1回	ハンブルク
	1950年10月4日～8日
第2回	ブレーメン
	1953年4月7日～11日
第3回	ニュルンベルクなど
	1955年9月30日～10月5日
第4回	ケルン, ボン
	1957年9月30日～10月4日
第5回	ベルリン (西ベルリン)
	1961年3月29日～4月2日
第6回	フランクフルト
	1964年5月19日～23日
第7回	ハンブルク
	1967年10月2日～7日

【表1】 第1回～第7回の連邦会議の開催地と開催期間

(2) 第1回連邦会議におけるザールハーゲの報告

第1回連邦会議は、10月4日に、ハンブルク市内のクリオハウスで行なわれた開会式をもって始まった。18:30開始の開会式は、ハンブルク市の合唱団のコーラスで幕を開け、一般ドイツ教員連盟のマックス・トラエガー (Max Traeger, 1887-1960) の挨拶、ハンブルクの州視学官を務めたエルンスト・マテウス (Ernst Matthewes, 1901-1983) の「内的学校改革における学校田園寮」という題目の記念講演と続き、その後ザールハーゲが、第一議長という立場から、「ドイツにおける学校田園寮運動の歴史と目下の状況」に関する報告を行なった (この報告は、連盟の機関誌第1号の中に全文が掲載されているが、機関誌について取り上げる第5節ではなく本節において取り上げる)¹⁰。

ザールハーゲの報告は次のような一声で始まっている。「大変大きな喜びと、深く感動した気持ちをもって、私はドイツの学校田園寮の最初の連邦会議を開催します。なお、最初というのは、ナチス期において、かつての全国連盟が強制的同質化を被って解散された後、マールブルクとゴスラーの教員集会のイニシアティブに基づいてドイツ学校田園寮連盟が再び新設されたという限りにおいて最初ということですよ」¹¹。

この第一声に、学校田園寮運動の歴史を組織面から見た際の、重要な認識の一端が垣間見られる。すなわちこの連邦会議は、戦後発足した連盟にしてみれば最初の会議ではあるが、「最初」に「ドイツ学校田園寮

連盟が再び新設されたという限りにおいて」という但し書きを加えていることから、組織名は、ドイツの東西分断も反映して、“Reichsbund der deutschen Schullandheime”から“Verband Deutscher Schullandheime”へと若干変更されたとは言え、かつての全国連盟との繋がりをザールハーゲは明らかに強調しているのである。

一方でナチス期に関しては、全国連盟が強制的同質化を被って解散させられた時代であると位置付けることで、ザールハーゲを始めとする人的連続性があるながらも断絶した時代であることが暗に示されている。第二次世界大戦後の教育において、ヴァイマル期への帰還 (とりわけヴァイマル期に開花した新教育運動を参照軸とするような帰還) を目指すことでヴァイマル期と戦後期の連続性ならびに両者とナチス期との断絶性が提唱されたが、学校田園寮運動に関しても、組織面に関しては、全国連盟の解散を強調することによって、同じような図式をザールハーゲは見出しているのである。

しかしながら、組織を離れて学校田園寮運動それ自体をみた場合、ザールハーゲは必ずしもナチス期を断絶の時期としてのみ位置付けていたわけではなかった。彼は、報告の中で、学校田園寮運動の歴史を具体的に振り返りながら次のように述べる。

「インフレーション、デフレーション、空景気と経済危機、大変革、全体主義体制、HJとの敵対、戦争と学童疎開、爆撃、難民の悲惨、降伏、占領、通貨の暴落と通貨改革といったような最近の四半世紀のあらゆる混乱にも関わらず、ドイツの学校田園寮運動は驚くべきまっすぐな発展を示しました。もちろん全てのこれらの出来事は我々の活動に痕跡を残すことなく過ぎ去ったわけではありません。私たちは、再三再四、変えられた経済的・政治的状況に私たちを適合させなければなりません」¹²。

報告の中でも個々具体的に示されているように、全国連盟の創設年に当たる1925年から連盟の創設年に当たる1950年までの25年間のドイツは、世界恐慌、ナチスの独裁、第二次世界大戦、敗戦と東西分断などを経験しており、稀に見る激動の時代であったと言っても過言ではない。しかしながらそうした激動の時代の中にありながらも、学校田園寮運動は驚くべきような発展を続けていったと主張しているのである。その点においては、組織面を「断絶」と認識していることとの違いを指摘できる。ただし、時代の影響を免れながら発展していったとは決して見ておらず、ナチス独裁に起因する「全体主義体制」や「戦争」などにも適合さ

せながらの発展であったと捉えている。一方でそうした見方からはナチス独裁自体に対する批判的認識を見出すことはできず、「インフレーション」も「全体主義体制」も同じ「混乱」として捉えるような発言は、そうしたザールハーゲのナチス独裁への認識を裏付けるものである。

続いてザールハーゲは、上述の発言の中の諸々の混乱の中でもナチス体制下の混乱に特に焦点を当てて次のように述べる。

「しかもそのうえ、HJが全ての学校田園寮を解体することを明言した時代がありました。というのも、彼らは、私たちの全国連盟を、彼らによって導かれたユースホステルとの合併へと強制したからです。しかし私たちによって、学童疎開において、戦勝後における新しい学校制度への先取りをなす試みがなされました。学校田園寮の問題に関して、ライヒ青少年指導部において繰り返された議論が行なわれ、「いいえ」と言うことや、学校制度の不可欠な構成部分としての学校田園寮の独立性をあくまでも固辞することは、私たちにとって自己の信念を主張する勇気をかなり必要としました」¹³。

筆者も既にそれぞれ研究課題として取り上げてきたが¹⁴、ここには、ナチス体制下における学校田園寮運動の二つの重要な事項への言及が見られる。一つめは、ユースホステルと同様に学校田園寮をも自らの管轄下に置こうとして学校田園寮運動に圧力をかけたHJとの敵対である。その史実自体は確かに見られたものであるが、ここで重要なことは、上述したようにザールハーゲの中でナチス独裁自体への批判的認識があまり見られないことに比して、HJに対する敵対がかなり強調されていることである。自分たちの領域を守ること以上の理由があったとは言い難いものの、ナチス体制下で学校田園寮運動がHJからの侵食に対して対抗したという史実は、ザールハーゲにとって、学校田園寮運動の正当性を主張するうえで格好の素材であったと言えるのである。

二つめは、HJからの圧力に関する記述の間に挟まれている形になっているが、「はじめに」でも述べたように、ザールハーゲらを始めとする学校田園寮運動関係者の学童疎開への関与である。ザールハーゲらは、学童疎開を学校田園寮運動と類似したものとみなし、学童疎開もまた田園地域における共同生活を通して通常の学校では体験できないことを体験しうる「進歩的な教育の場」であると捉えて積極的に学童疎開を押し進めたのであるが、その際に、学童疎開のもとで行なわれている「教育活動」は、戦後学校田園寮運動によっ

て継承されうるという主張が繰り返し提起された。そのことが、「学童疎開において、戦勝後における新しい学校制度への先取りをなす試みがなされました」という彼の言葉として明示されているのである。戦後においても依然として学童疎開と学校田園寮運動との繋がりを否定しておらず、それゆえに学童疎開への関与に対する反省が見られないことが注目されるが、逆に言えば学童疎開への関与も「進歩的な学校教育改革」への純粋な意志の現れであるとすることによって、ザールハーゲが、ナチス体制下での学校田園寮運動を正当化しようとしたと見ることができる。

このようにザールハーゲは、HJに対して積極的に対抗したことと共に、学童疎開を通して戦後の「進歩的な教育構想」を提示したことを主張することを通して、ナチス体制下における学校田園寮運動の正当性をアピールしたのである。なお、学童疎開と関連付けながらナチス体制下の学校田園寮運動の正当性を主張する言い回しは、上述のニコライにも見られ、本報告と同じく機関誌第1号に掲載された論稿の中で、「私たちの学校田園寮は、「学童疎開」において、戦時中における10万の子どもたちの健康と生命を救った」¹⁵と述べている。

こうした時代ごとの混乱に関する言及を受けて報告は次のように続く。「学校田園寮教育はそれ自体ずっと変わってはいません。同年に「学校田園寮—ある教育的行為—」というタイトルのもとでなされたハンブルク・ラジオ放送を經由して広がり、学校田園寮運動の行動計画書として印刷・出版され、そして増刷されていった1925年のベルリン会議における私の講演は、あらゆる時代を越えてほとんど変わらないままです。最近では1939年に、また、占領軍の認可のもとで1947年にも再び出版されました」¹⁶。

ザールハーゲの立場は明瞭である。すなわち、ナチス体制下で組織的な改編がなされたとは言え、たとえ時代や社会状況が移り変わったとしても学校田園寮運動自体は決して変わることがないというのである。その根拠としているのが、ザールハーゲの主著であると共に学校田園寮運動の最重要文献の一つである小冊子『学校田園寮—ある教育的行為—』(Das Schullandheim. Eine pädagogische Tat.)が、ヴァイマル期、ナチス期、戦後期と時代を越えて版を重ねていることである。なお、この著作の元になった講演が行なわれた「1925年のベルリン会議」とは、ベルリン中央教育研究所において1925年10月6日～7日の日程で開催された第1回の全国連盟の会議のことを指している。ちなみに、『学校田園寮—ある教育的行為—』は、その後

1960年に改訂版が出されており、それ以前のものとは比較して1頁強ほど分量が増えている。増えた頁の中ではこれまでの学校田園寮運動の歴史的経緯に言及されるが、そこでは、ここまでに見てきたような、学校田園寮運動の一貫した継続的な発展や、HJから被った困難などが主張されている¹⁷。

以上、第1回連邦会議のザールハーゲの報告に基づきながら、ナチス期の学校田園寮運動に関する彼の認識を検討してきた。それを端的に述べると、ナチス独裁下において確かに学校田園寮運動は組織面での変容を被りはするものの、それ自体はヴァイマル期から戦後期へと橋渡しをする形で一貫して発展を続けたというものである。ザールハーゲの降格処分への要因ともなった学童疎開への関与は、戦後へと継承されうる「進歩的な教育活動」の先駆的実践であると位置付けられており、それもまた発展の一要素とみなされていると言える。そうした認識であるがゆえにナチス独裁に対する批判的な見方は乏しいものであり、ナチス独裁は世界恐慌などと並列されうる困難の一つに過ぎないとも受け取られるような認識がみられた。そうした中、明確に批判しえたのは、学校田園寮運動に対して徹底した攻撃を加えたHJであり、HJとの抗争は自らの正当性を主張しうる根拠ともなり得るものであった。

(3) 文部大臣への第1回連邦会議の案内

上述してきたような、報告の中で示された認識は、会議を前にして既に示されていたものであったと言える。1950年8月22日に、ザールハーゲは、各州の文部大臣への転送を目的として、常設文部大臣会議の事務局に第1回連邦会議の開催に関する書簡を送っているが、そこでは次のような記述が見られるのである。

「この30年来、あらゆるドイツの州で発展し、戦争によって中断されるも決して終わりを迎えることのない学校田園寮活動は、青少年に適した共同体教育ならびに自然に結び付けられた授業へと向けられた目標設定における、いかなる要求にも奉仕するものです。学校田園寮活動は、今日、健康面での理由と社会的・政治的な理由からこれまで以上に必要不可欠となっています。学校田園寮活動は、実際に、戦争の終結以来絶えず増加しており、例えばハンブルクでは、昨年、1,900を超える学級のおよそ62,000人の子どもたちの参加が見られました。戦争によって損害を受けたり目的から隔絶したりした寮の修復とは別に、既にこれまでに30軒の新設が知られています」¹⁸。

このようにザールハーゲは、第1回連邦会議を前に

して、これからのドイツにおいて学校田園寮での活動が果たしうるであろう多大な役割と、現に学校田園寮での活動が求められつつある状況を強調することを通して、各州の文部大臣に向けて学校田園寮運動の再建をアピールしたのである。公的な後ろ盾を得ることを目的とした学校田園寮運動のアピールは、ヴァイマル期及びナチス期にも盛んに見られたものであったが（それがゆえにナチス体制に容易に絡めとられてしまうのであるが）、戦後の連盟にとっても最重要課題であったことが窺われる。

そして、本稿のテーマに関わって指摘すべきは、学校田園寮運動が30年来発展を続けたことと、戦争による中断を経ても終わることがなかったことについてザールハーゲが言及している点である。第1回連邦会議の報告で見られたような、学校田園寮運動はナチス期も含めて一貫して発展を続けているという認識が、ここでも確認できるのである。確かにザールハーゲは戦争による学校田園寮運動の中断を認めてはいるものの、それは飽くまでも物理的な意味での中断であり、ナチスの権力掌握をもって学校田園寮運動が中断したとは決して位置付けられていないことも注目すべき点である。

なお、最後の一文にある「目的から隔絶した寮」には、ザールハーゲが深く関与した学童疎開キャンプも当てはまるのであるが、書簡の記述からはまるで他人事のような印象を受ける。

4. ドイツ学校田園寮盟の連邦会議に関わる連邦大統領への書簡

第1回連邦会議に際して、ザールハーゲが常設文部大臣会議事務局に書簡を送っていたことに前節で言及したが、その後もザールハーゲは、連盟の第一議長として、連邦政府や州政府に対して学校田園寮運動の積極的なアピールを続けている。こうしたアピールは、ザールハーゲが学校田園寮運動の再建において果たした最大の貢献の一つであろう。そうした努力の甲斐もあり、連邦政府のお膝元のボン及びケルンで開催された1957年の第4回連邦会議に際して、初代連邦大統領のテオドル・ホイス（Theodor Heuss, 1884-1963）より御祝いの言葉をもらうことができた¹⁹。

その後、1959年9月に、ホイスに代わりハインリヒ・リュブケ（Heinrich Lübke, 1894-1972）が第二代の連邦大統領に就任したが、そのリュブケ大統領に宛てた、連邦会議のアピールに関するザールハーゲの二つの書簡をもとに、戦後のザールハーゲにおけるナチス期の学校田園寮運動に関する認識を間接的に探りた

ハーゲの二つの著述を通して、戦後のザールハーゲにおけるナチス期の学校田園寮運動に関する認識を探りたい。

(1) 機関誌『学校田園寮』について

最初に、連盟の機関誌について、第3節と同様に簡単に概観したい。1925年に発足した全国連盟は、1927年10月に初めて機関誌を刊行した。ただし初期の頃は、「機関誌」という表現は妥当とは言い難く、『ドイツ学校田園寮全国連盟「報告」』(Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V. "Mitteilungen") という誌名に表れているように、分量は決して多くない「ニュースレター」のようなものであった。その後、機関誌は、誌名や1巻当たりの分量、そして刊行頻度などが様々に変わっていくものの、ドイツユースホステル全国連盟への編入によって全国連盟が解散して機関誌自体も休刊となった1935年1月から1936年2月の期間を除いては、ヴァイマル期及びナチス期を通じて刊行を重ねていった。ただし、いわゆる「総力戦」への突入を背景として1943年3月をもって休刊となり、そのまま敗戦を迎えることになった。

そうした中、1950年に発足して第1回の連邦会議を無事に終えた連盟は、1951年1月より、『学校田園寮—ドイツ学校田園寮連盟のニュースレター—』(Das Schullandheim. Mitteilungsblatt des Verbandes Deutscher Schullandheime) という誌名で機関誌の刊行を新たに開始した。1巻当たりの分量も以前と比較するとかなり分厚いものとなった。ヴァイマル期及びナチス期においては、機関誌の名称が変化しても号数は積算されていったなか、戦後の機関誌が新たに第1号として刊行されたのは、学校田園寮運動の新しい出発を印象付ける意味もあったのであろう。

(2) 第1号における巻頭言

新しい機関誌の姿勢を示すのに極めて重要である、第1号の巻頭言に当たる「はじめに」を書いたのはザールハーゲであった。戦後における連盟の機関誌の出发点を意味する巻頭言をザールハーゲが書いたことは、彼が第一議長という立場だったことを踏まえると当然かもしれないが、必ずしもそれだけが理由ではないと考えられる。というのも、1927年10月の全国連盟の機関誌の創刊号の巻頭言を書いたのもまたザールハーゲであり、全国連盟の議長のニコライではなかったからである。トップである議長ではないにも関わらず全国連盟の機関誌の創刊号の巻頭言をザールハーゲが書いたのは、彼が全国連盟の理事の一人として、機関誌編

集の責任者だったからである。ザールハーゲはヴァイマル期からナチス期を経て戦後も亡くなるまで継続的に機関誌の編集長を務めており、連盟の機関誌第1号もザールハーゲの編集であった。それゆえ、ザールハーゲが第1号の巻頭言を書いた背景として、彼が第一議長であったことに加えて第1号の編集の責任者であったことも考慮に入れる必要がある。

「はじめに」は、その性格上、決して長い文章ではないが、上述したことも含むこれまでの機関誌の経緯と共に学校田園寮運動の歴史が綴られている。学校田園寮運動の歴史のうち、本稿の主題であるナチス期については次のような記述が見られる。

「振り返るとほとんど8年間に亘る空白期間があり、比類のない崩壊が見られますが、しかしながら復活への気力もまた見られます。これまでのあらゆる政治的・経済的な混乱にも関わらず、学校田園寮運動は存続しています。学校田園寮運動はその教育的な根本態度において忠実に残ったままです。既に、戦後、48軒の新しい学校田園寮が誕生しました。ドイツ連邦共和国において新しい連盟が設立されました」²⁵。

戦後における学校田園寮運動の復活を具体的な数値も含めつつ強調する一方で、先の第1回連邦会議での報告にも見られたように、「政治的・経済的な混乱」に直面しながらも学校田園寮運動はその本質において不変である、ということがやはり彼の基本的な立場である。さらにザールハーゲが「8年間の空白期間」に言及していることも注目される。この「8年間」とは、計算上、「総力戦」への突入を前にして機関誌が休刊となった1943年4月を起点としている。空白期間として機関誌の物理的な休刊期間を挙げることは当然であるかもしれないが、その一方でナチスの権力掌握を空白期間の起点とするような見方が見られないということも指摘したい。

先述したように連盟の機関誌は連邦会議について伝える役割をもっていたが、この第1号は前年の第1回連邦会議について広報するという性格を持つものであった。そのため第3節で取り上げたザールハーゲの報告もこの第1号に掲載されている。

(3) 第35号における学校田園寮運動の歴史の回顧

連盟の創設から10周年に当たる1960年5月の第35号では、巻頭でザールハーゲが、第一議長の立場から「ドイツの学校田園寮運動の発展と課題」と題した論稿を寄せており、これまでの学校田園寮運動の歴史を回顧している。その中でナチス期に関しては次のように述べられる。

「ドイツの学校田園寮運動の発展は、もちろん、1933年に真っ先に断絶を被った。しかしながら最終的にナチス国民福祉団とHJに対して打ち勝つことができた。ナチス教員連盟に「統一された」教育者集団は純粋な学習学校（Lernschule）だけで我慢するよう強いられようとはしなかったからである。政治的な機関（Gremien）が絶えず頻繁に郷土教育への権利をかけて学校と争っていたにも関わらず、親たちは本来的な思想に忠実にとどまり、多くのさらなる学校田園寮を創造した。1939年の戦争の勃発に際して大ドイツ帝国には378の学校田園寮があったが、それらの大部分は目的から逸脱され、学童疎開、軍事教練、田園奉仕の場として、最終的には高射砲の宿舎、野戦病院、転営ハイムとして国家の目的のために組み入れられた」²⁶。

この記述においてまず重要なことは、1933年以降も学校田園寮運動が発展していったというこれまでに示してきたザールハーゲの言い回しとは異なって、ナチスの権力掌握の1933年を「断絶の年」と述べていることである。しかしながらそれでもナチス独裁自体を批判的に捉えているとは言えず（ましてナチス期の学校田園寮運動を否定的に捉えているとは言えず）、やはり批判は、学校田園寮運動を正当化する根拠となり得るHJ（及びナチス国民福祉団）に向けられ、HJによる侵食からの「勝利」の歴史としてナチス体制下の学校田園寮運動が描かれている。

そしてその際、HJのとの抗争が、「学習学校」の押し付けを巡る抗争として示されている。「学習学校」とは、知的学習ばかりに重きを置いた「旧教育」を象徴する学校を示すものとして、ドイツ新教育運動に根差した多くの教育改革運動の中で克服の対象として批判的に用いられた概念であり、学校田園寮運動の中でも頻繁に使われたものであるが、しかしながらそうした「学習学校」を巡る抗争としてHJとの抗争を描くことには違和感がある。というのも、そうした史実は管見の限り認められない²⁷うえに、そもそも勉強しか教えない存在として学校や教師を徹底的に攻撃したHJが、知的教育の権化とも言える「学習学校」に固執していたとは到底考えられないからである。

それゆえ、ヴァイマル期以来の新教育運動の精神を体現し続けている存在として、換言すれば、ナチス独裁下にあっても新教育運動の精神を貫き続けた「成功の物語」として、ザールハーゲはナチス体制下の学校田園寮運動を脚色したのではないかと考えられる。教員と共に学校田園寮運動を支えた親たちが「本来的な思想に忠実にとどまった」と記しているのはそのことを裏付けるものである。そのため、冒頭で1933年を断

絶の年とザールハーゲが位置付けていることを強調したが、ナチス体制下でも学校田園寮運動が継続したとザールハーゲは認識していると実際には見ざるを得ない。

加えて、戦時下の学校田園寮運動に関する記述についてであるが、ザールハーゲがそのことで降格処分を受けるほど学童疎開に積極的に関与したことを踏まえると、1950年8月22日の書簡と同様、少なくとも学童疎開キャンプとしての学校田園寮の目的外使用に関しては、やはり他人事だという印象を受ける。

6. おわりに

以上本稿では、それ自体に正面から向き合った史料が管見の限り見られないことから、連邦会議での報告、各種書簡、機関誌上での著述などの様々な史料から断片的に描いた形になったが、第二次世界大戦後初期の学校田園寮運動の中心的存在であったザールハーゲにおけるナチス期の学校田園寮運動や自分自身に関する認識を取り上げてきた。

本論の繰り返しにはなるが、これまでに明らかにしてきたことを再度取り上げて本稿のまとめとしたい。

本稿で取り上げた第1回連邦会議の開会式での報告と、機関誌第1号の巻頭言は、戦後の学校田園寮運動の出発点におけるザールハーゲの立場（これは同時に連盟の立場にもなるが）を公的に示すものとして最も重要なものであろう。とりわけ開会式での報告は、戦後のザールハーゲにおけるナチス期の学校田園寮運動に関する認識のエッセンスを集めたものであったと言える。すなわちザールハーゲは、学校田園寮運動がナチス体制下で組織面での変容を被ったことを認めると共に、ナチス体制は学校田園寮運動に混乱をもたらしたと捉えているものの、そうした中でも学校田園寮運動は発展を遂げたと主張しているのである。そしてザールハーゲが深く関与した学童疎開も、戦後の教育への「貢献」として語られている。一方でナチスの独裁に関しては、それが世界恐慌などと同次元の混乱の一つとして位置付けられていることなどによっても裏付けられるが、全く批判的な認識は見られず、それゆえにナチス独裁によって学校田園寮運動が変容したという認識も見られない。ナチスとの関係で唯一批判的に認識されているのが、ナチス体制下で学校田園寮運動への侵食を試みたHJであり、そのようなHJへの対抗は、学校田園寮運動の正当性のアピールに繋がるものであったと言える。

以上のような、ナチス独裁という混乱の中でも学校田園寮運動は発展を続けたという認識は機関誌第1号

の巻頭言でも同様に見られ、そうした認識のもとに戦後の学校田園寮運動は出発したのである。また、第1回連邦会議での報告や、機関誌第1号の巻頭言とは異なり公刊されたものではないが、常設文部大臣会議事務局に宛てられた書簡にも、ナチス期を断絶の時期とは位置付けないような学校田園寮運動の継続的な発展が描かれていた。

こうした連盟の発足直後の時期におけるザールハーゲの学校田園寮運動認識と、ザールハーゲの自身の降格処分に対する対応は軌を一にしていたと言える。すなわち、HJには鋭い批判を向けつつもナチス独裁に対する批判的な認識は見られないのである。また、処分の不適切を訴えるための、40年に亘って職務に専念してきたという主張も、学校田園寮運動の変わらぬ発展を想起させるものであろう。

学校田園寮運動を公的にアピールするという書簡の性格上止むを得ないかもしれないが、連盟の発足から10年～15年以上経ったリュプケ大統領宛ての書簡においても、学校田園寮運動はその発足以来継続的に発展していったとザールハーゲは述べており、ナチス期をその発展から区別する視点は見られなかった。学校田園寮運動の発展の基準として最も目に見えやすい学校田園寮の軒数を重視する連盟(全国連盟)の見方は、こうしたザールハーゲの認識に拍車をかけるものであったと言える。

時代は前後するが、連盟の発足から10年となる1960年に刊行された連盟の機関誌の第35号に掲載された論稿では、ナチス期を「断絶の時期」とする表現する文言が見られた。しかしながらこの論稿でも実際にはナチス期が学校田園寮運動の断絶の時期と捉えられているとは言えず、HJに対抗しながら新教育運動としての学校田園寮運動を守り抜いた時代として、脚色された形でナチス期が描かれている。

以上、ナチス期の学校田園寮運動や自分自身に関する戦後のザールハーゲの認識を見てきたが、全般的にナチス期の学校田園寮運動を否定的に捉える認識は見られず、そもそもナチス期そのものを批判的に捉える認識(飽くまでも批判はHJに対してである)も見られない。その意味で彼の認識は、1950年代のみならず1960年代のものであっても、いわゆる「過去の克服」からは遠い状況にあったと言わざるを得ないであろう。

最後になるが、筆者は別稿において、ヴァンゼー会議が開催されたヴァンゼー別荘が、西ベルリン・ノイケルン区所有の学校田園寮として戦後36年に亘って使用された問題を組上に載せた²⁸。「非人道的な歴史」を有する場所に学校田園寮が設置されると共に、長きに

亘ってそれが使用され続けた背景には、本稿で明らかにしてきたような、ザールハーゲを始めとする学校田園寮運動関係者のナチス期の学校田園寮運動に対する認識が存在していたと言えなくはないであろう。

〔注〕

¹ Dr. Heinrich Sahrhage, Lebenslauf, in: Staatsarchiv Hamburg (künftig: StAHH) 731-8_A768. (このファイルには史料番号が付されていない)

² Ebenda.

³ 江頭智宏「第二次世界大戦下ドイツ・ハンブルクの学童疎開への学校田園寮運動の関わりに関する考察—ハインリヒ・ザールハーゲの学童疎開認識に焦点を当てて—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要〔教育科学編〕』第64巻第2号, 2018年, 67-81頁。

⁴ Dr. Heinrich Sahrhage, Lebenslauf (wie anm 1).

⁵ K. Kruse: Die Schullandheimarbeit nach dem Zweiten Weltkrieg (1945-1970), in: Verband Deutscher Schullandheime e. V. (Hg.): Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Wandel der Zeiten. Zusammengestellt zum 75-jährigen Jubiläum, Hamburg 2002, S. 137-166.

⁶ Brief von Fachausschuss 6b für die Ausschaltung von Nationalsozialisten an H. Sahrhage, den 29. April 1947, in: StAHH 361-3_A 2626 (Nr. 180).

⁷ Brief von H. Sahrhage an die Schulbehörde der Freien und Hansestadt Hamburg, den 9. Dezember 1953, in: StAHH 361-3_A 2626 (Nr. 239).

⁸ Satzung des Verbandes Deutscher Schullandheime, in: Bundesarchiv Koblenz (künftig: BAK) B304/3195 (Nr. 84).

⁹ 本表については、ドイツ学校田園寮連盟の機関誌『学校田園寮』より作成。

¹⁰ 第1回連邦会議の開会式の内容については以下のものなどを参照。Erste Bundestagung des Verbandes deutscher Schullandheime in Hamburg vom 4. bis 8. (11.) Oktober 1950, in: Das Schullandheim. Mitteilungsblatt des Verbandes Deutscher Schullandheime (künftig: Das Schullandheim), Heft 1 (1951), S. 2; Erste Bundestagung des Verbandes deutscher Schullandheime in Hamburg vom 4. bis 8. (11.) Oktober 1950, in: StAHH 361-2VI_1597 (Nr. 4).

¹¹ H. Sahrhage: Eröffnungsabend im Curiohaus, in: Das Schullandheim, Heft 1 (1951), S. 2.

¹² Ebenda, S. 3.

- ¹³ Ebenda.
- ¹⁴ 江頭智宏，注3の前掲論文。同「第二次世界大戦期ドイツにおける学校田園寮運動の指導者たちの学童疎開認識に関する考察—機関誌『学校田園寮』に焦点を当てて—」『教育史研究室年報』第23号，2018年，1-30頁。同「ナチ時代における学校田園寮運動とヒトラー・ユーゲントの関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要〔教育科学編〕』第60巻第1号，2013年，27-37頁。
- ¹⁵ R. Nicolai: Der langjährige Vorsitzende der früheren Reichsbundes schreibt aus der Ostzone, in: Das Schullandheim, Heft 1 (1951), S. 7.
- ¹⁶ H. Sahrhage: Eröffnungsabend im Curiohaus, S. 3.
- ¹⁷ H. Sahrhage: Das Schullandheim. Eine pädagogische Tat, Bremen 1960, S. 1.
- ¹⁸ Brief von H. Sahrhage an die Ständige Konferenz der Kultusminister Sekretariat, den 22. August 1950, in: BAK B304/3195 (Nr. 148).
- ¹⁹ 第4回連邦会議に向けたホイス大統領の挨拶は以下に掲載。Der Präsident der Bundesrepublik Deutschland an den Vorstand des Verbandes Deutscher Schullandheime anlässlich der vierten Nachkriegstagung in Bonn-Köln, in: Das Schullandheim, Heft 25/26 (1958), S. 1.
- ²⁰ Brief von H. Sahrhage an H. Lübke, den 6. Februar 1961, in: BAK B122/5194 (Nr. 265).
- ²¹ 第5回連邦会議に向けたリュプケ大統領の挨拶は以下に掲載。Grußwort des Herrn Präsidenten der Bundesrepublik Deutschland zur 5. (12.) Bundestagung der deutschen Schullandheime in Berlin, Ostern 1961, in: Das Schullandheim, Heft 39 (1961), S. 1.
- ²² 第7回連邦会議に向けたリュプケ大統領の挨拶は以下に掲載。VII. Bundestagung des Verbandes Deutscher Schullandheime, in: Das Schullandheim, Heft 65 (1967), S. 1.
- ²³ Brief von H. Sahrhage an H. Lübke, den 25. Oktober 1967, in: BAK B122/5194 (Nr. 215).
- ²⁴ Entwicklung der deutschen Schullandheimbewegung, in: BAK B122/5194 (Nr. 235).
- ²⁵ H. Sahrhage: Zum Geleit!, in: Das Schullandheim, Heft 1 (1951), S. 1.
- ²⁶ H. Sahrhage: Von der Entwicklung und Aufgabe der deutschen Schullandheimbewegung, in: Das Schullandheim, Heft 35 (1960), S. 2.
- ²⁷ 注14に掲載した2013年刊行の論文を執筆するうえで学校田園寮運動とHJとの関係に関する相当数の史料を閲覧したが、そうした内容の史料は管見の限り見当たらなかった。
- ²⁸ 江頭智宏「西ベルリン・ノイケルン区所有の学校田園寮に関する研究—東西分裂時代のヴァンゼー別荘で存続した「教育の場」—」『日本の教育史学』第60集，2017年，71-83頁。

Heinrich Sahrhage's Ideas Regarding the *Schullandheimbewegung* Movement and Nazism in the Post War Period

Tomohiro EGASHIRA*

The current paper addresses Nazism in the *Schullandheimbewegung* (movement for expansion of the school rural study center), which occurred in Germany after WWII. An analysis of the thinking of Heinrich Sahrhage (1892–1969) regarding the *Schullandheimbewegung* under Nazi Germany was undertaken through a review of his presentations and publications after WWII (1950's ~ 1960's). Sahrhage was chosen because of his responsibility as the first chairperson for the foundation of *Verband Deutscher Schullandheime* (National League for *Schullandheim*) after WWII, aimed to reconstruct the movement, as well as for his work as a member of the National Socialist Teachers League during the Nazi era aimed to toward advance *Schullandheimbewegung*.

Detailed review of his reports in the national meeting of *Verband Deutscher Schullandheime*, his writings in the magazine of *Verband Deutscher Schullandheime*, and his letters to President Heinrich Lübke etc. revealed the following two points on the understanding of Sahrhage about *Schullandheimbewegung* in Nazi Germany.

- 1) On the whole, Sahrhage didn't necessarily have negative thoughts about Nazism. He certainly considered that totalitarianism brought about confusion to *Schullandheimbewegung*, yet believed that totalitarianism and the Great Depression were both responsible for the same state of confusion in society. However, Sahrhage severely protested the Hitler Youth movement, which served to upset the promotion of *Schullandheimbewegung* in the Nazi era (The disturbance from the Hitler Youth led those behind the *Schullandheimbewegung* movement to go against a commitment to Nazi Germany).
- 2) Sahrhage didn't regard Nazi Germany as an time of discontinuity for *Schullandheimbewegung*, but rather considered that *Schullandheimbewegung* had developed despite the difficulties of the Nazi era. According to him, *Schullandheimbewegung*, consistently developed since the early years of its establishment, and the participation in *Schullandheimbewegung* in *Kinderlandverschickung* (evacuation of schoolchildren in Germany during WWII), legitimized the development of *Schullandheimbewegung* in the Nazi era.

As described above, Sahrhage's understanding of the *Schullandheimbewegung* from Nazi ideology after WWII was far from the notion of *Vergangenheitsbewärtigung* (coping with the past).

* Associate Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University